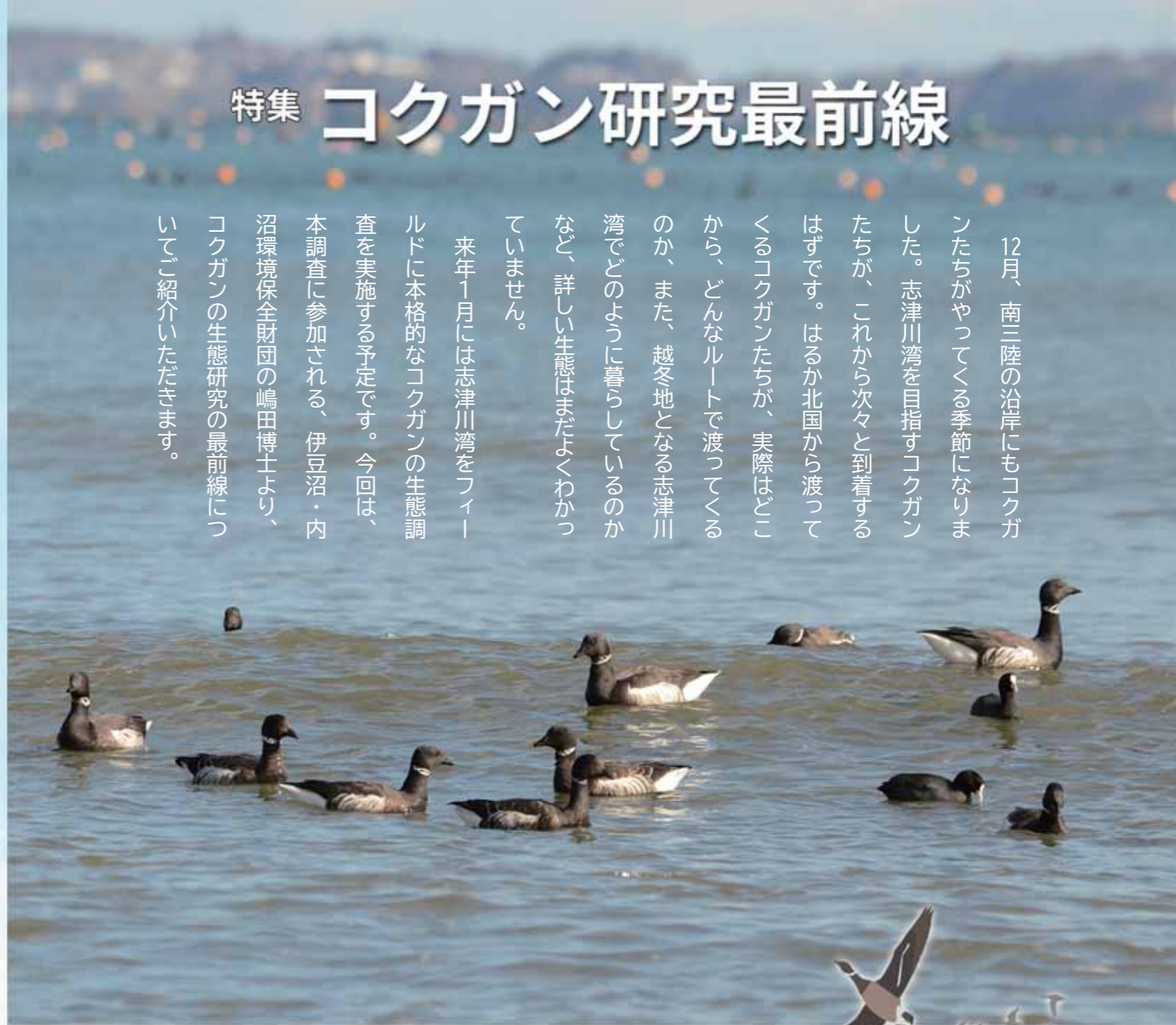


特集 コクガン研究最前線

12月、南三陸の沿岸にもコクガンたちがやってくる季節になりました。志津川湾を目指すコクガンたちが、これから次々と到着するはず。はるか北国から渡ってくるコクガンたちが、実際はどこから、どんなルートで渡ってくるのか、また、越冬地となる志津川湾でどのように暮らしているのかなど、詳しい生態はまだよくわかっていません。

来年1月には志津川湾をフィールドに本格的なコクガンの生態調査を実施する予定です。今回は、本調査に参加される、伊豆沼・内沼環境保全財団の嶋田博士より、コクガンの生態研究の最前線についてご紹介いただきます。



コクガンの巣とヒナ (撮影: Vladimir Pozdnyakov)



ロシア北極圏のコクガンの繁殖地 (撮影: 佐藤達夫)

コクガンは冬になると漁港などで見ることのできる身近な鳥ですが、志津川湾でどのように過ごしているのか、そして夏に広いロシア北極海沿岸のどこで繁殖し、どのようなルートで志津川湾と行き来しているのか、まだ解明されていない、謎の多い鳥です。しかし、近年、コクガンの研究が少しずつ進み、さまざまなことがわかってきました。北海道の道東コクガンネットワークでは2014/15、2016/17年の3年にわたってコクガンの全国個体数調査を行いました。その結果、越冬期の個体数はこれまでわかっていなかったに近いものだったのですが、秋の渡りで道東の野付湾で8,600羽あまりが滞在していることがわかったのです。差し引きおよそ6,000羽がここで越冬しているか、これもまた謎です。仮説のひとつは、その6,000羽は朝鮮半島へ渡っているというものです。

長距離の渡りルートや越冬生態を解明するため、私たちのグループは2014年に気仙沼市大谷海岸で9羽のコクガンを捕獲し、5羽に衛星送信機を装着し、越冬期の行動や春の渡りを追跡しました。この捕獲の成功は日本で初めてのことでした。越冬期の動きをみると、海上を広く利用していると思ってい

のですが、意外と狭い範囲を利用していて、捕獲地を中心に6km以内の沿岸部を主に利用し、2km以上の沖合にはいないことがわかりました。その後、春の渡りを開始したコクガンは、北海道東部へ移動し、野付湾や根室半島北部、国後島南部を中継し、1羽だけオホーツク海を縦断してロシアのオホーツク海北部沿岸域に到達しました。衛星で追跡できたのはここまででしたが、9羽のうち1羽がロシア北極圏のレナデルタ南部で撃たれて回収されました。レナデルタはコクガンの繁殖地として推定されている場所、その近くまでたどり着いたのです。越冬期の行動や春の渡りルートが少し見えてきました。

一方、コクガン共同調査グループでは2017年から野付湾で捕獲したコクガンの追跡を行い、秋の渡りルートの解明をすすめています。秋に野付湾から追跡されたコクガンは志津川湾でも記録され、志津川湾を含め、南三陸沿岸で越冬するコクガンは野付湾から渡ってくるということがわかってきました。また2018年の秋には、1羽のコクガンが日本海を横断し、北朝鮮の東海岸に到達しました。先に述べた行方不明の6,000羽が朝鮮半島に渡っているという仮説を支持しています。

多くの人のご尽力で、コクガンの謎の解明がすすみ、少しずつピースが埋まり始めています。



推定されたコクガンの春の渡りルート (実線: 衛星追跡で追跡できたルート、★: 撃たれて回収された場所、点線: 推定される移動ルート)。Shimada et al. (2017)を一部改訂。

公益財団法人宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団
総括研究員 嶋田 哲郎

コクガンは北半球に55万羽以上が生息し、3つのグループ(正確には亜種)に分かれます。志津川湾で冬を過ごす *Branta bernicla nigricans* は太平洋を挟んで東アジアと北アメリカに分布します。北アメリカの個体数は15万羽と多いのですが、東アジアでは5,000~8,700羽ほどで、そのうち日本の個体数は2,500~3,000羽とされ、ラムサール条約の登録基準となる1%は25羽です。志津川湾ではこの登録基準値をはるかに上回るコクガンが冬を過ごしているのです。また、コクガンは環境省レッドリストで絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。



泊漁港で休息するコクガンの群れ (撮影: 鈴木卓也)



発信機をつけたコクガン (写真中央のコクガンの背中から細いアンテナ(矢印)が出ているのが見える。荒砥漁港にて撮影: 鈴木卓也)